

シンクタンクを栃木県に

開倫塾 塾長 林明夫

栃木県の成長に今一番必要なものは何か。「シンクタンク」、つまり地域や経済、企業の成長を戦略的に政策として練り上げる「研究所」だ。

かつて、栃木県には「とちぎ総合研究機構」という全国でも有数の地域に根ざしたシンクタンクがあった。県の経済の活性化と県民生活の向上のために、県や市町村、経済同友会などの経済団体、企業などから委託を受け、また、独自にプロジェクトを組み、基礎研究を積み重ねた。栃木県の産業基盤を政策面で下支えした功績は極めて大きい。

しかし、足利銀行の全面的支援で行われていたシンクタンクであったため、足利銀行の一時国有化により、活動が休止。今日に至っている。

栃木県経済をリードし続けた輸出主導型の製造業が危機的な状況に陥っている大不況の今こそ、産業界、栃木県、大学の三者と、マスコミ、そして何よりも栃木県に生活し、働くすべての人々の手による「シンクタンク」を再スタートすべきと私は考える。

栃木県の潜在能力、可能性は限りなく大きい。しかし、いつになっても顕在化しない、形となって表れない。このもどかしさ、歯がゆさ、閉塞感を感じているのは私だけではないと思う。大不況の今だからこそ本格的に調査・研究、将来を見据えた政策提言すべきことは多い。「道州制」「地方行財政改革」「自治体レベルの規制改革」「PPP(官民連携)」「高等教育機関の地域の発展における役割」「サービス産業の生産性向上」「農業への株式会社参入」「FTA、EPA(経済連携協定)締結後の県経済のあり方」「自動車産業の進化」「航空宇宙産業の振興」「森林政策―路網整備―」「学校教育制度改革」「外国人労働者及び移民受け入れ」「外国資本・企業の受け入れ促進」、そして何よりも「不況対策の膨大な予算の使い途について」などなど。

「田舎の3年、京の3日」ということばがある。どんなに「一所懸命」に、熱心に、まじめにものごとに取り組んでも、マンネリに陥ったり、越えられない壁が現れることがある。そのようなときには、知的刺激にあふれる自分にとっての「京」に出掛け自らの力でリズムを取り戻す勇気、チャレンジ精神が大切だ。新しい「シンクタンク」が栃木県における「京」の役割を果たすことを期待したい。

以上

